肉

二年

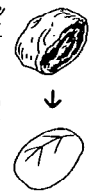
画数 6

筆順 丨 冂 内 肉

オン ニク

クン

成り立ち



〝にく〟の切りみの形をあらわした字です。〝人〟は〝にく〟の中に見えるすじめをあらわしたものです。

もともとは、牛や羊やぶたなどの〝食用肉〟をあらわした字ですが、〝肉体〟というように、人体の肉のいみにもつかわれています。

この字は、ヘンとしてつかわれるときには〝月〟という形になります。それで、これを〝肉月〟とよびます。今は、まったく〝月〟と同じ形ですが、むかしはすこしちがっていて、よく見るとくべつできました。

（肉　月へん→月↑　月→月↑　だい一かくがちがいました。）

使い方

▽ぼくは肉がすきです。とくにハンバーグが大すきです。野さいはあまりすきではありませんが、おかあさんは、「肉を食べる時は、野さいもいっしょに食べなければだめよ」といいます。

▽きょうの夕食はすきやきです。おかあさんが、牛肉としらたきや白さいなどを買って来ました。わたしはすきやきのなべの中では、牛肉がいちばんすきです。

熟語例

▽肉食（牛やぶたの肉をたべること。このはんたいは菜食といって、野菜をたべることです。また、「肉食どうぶつ」といえば、ほかのどうぶつを食べるどうぶつのことをいいます。このはんたいは「草食どうぶつ」です。）

▽肉体（人間のなまみの体。「肉体は、きたえればきたえるほど、よくうごくようになる」などといいます。）

▽肉親（親子やきょうだいのこと。「この世のだれよりも、肉親はたよりになるものだ」などといいます。）

馬

二年

画数 10

筆順 丨 厂 F 耳 馬 馬

オン バ

クン うま・ま

成り立ち

〝うま〟のかたちをあらわした字で、〝うま〟ということばをあらわしたものです。

漢音はバで、呉音はマです。わが国には大むかし、馬がいませんでしたから、馬をあらわすことばがありませんでした。中国から、馬がでんらいしましたので、中国のことばで〝マ〟といいました。

〝ン〟という字を一字だけよむときには、じっさいには〝ウン〟とよみますね。〝マ〟も、力をいれてはっきりいおうとすれば〝ウマ〟となります。馬を〝うま〟とよむのはそのためです。だから、ほんとうは〝ま〟や〝うま〟を訓というのは正しくないのです。

使い方

▽富士山にのぼったとき、馬にのりました。のってみると、ずいぶんせいがたかいので、びっくりしました。でも馬にゆられていくのは、とてもおもしろいものでした。

▽むかしは、馬はたいせつなのりものでした。たびをする人は、馬子にひかれた馬にのって、足をやすめたものです。

熟語例

▽馬子（馬かた。馬をひくしょうばいの人。「馬子にもいしょう」といえば、馬子でさえ、りっぱなきものをきれば、りっぱに見える、といういみです。）

▽馬脚（馬の足。「馬脚をあらわす」といえば、かくしていたことが、ばれる、といういみになります。）

▽馬耳東風（「馬の耳にねんぶつ」とおなじいみのことばです。人のいうことを、まったくきにかけないこと。「あの人は、わたしがなにをいっても、まったく馬耳東風だ」などといいます。）